◉特集《後篇》

コーヒーの木と暁の家

ルンアルン（暁）プロジェクト
中野穂積

♪一杯のコーヒーから 夢の花咲くこともある

１９８７年、チェンライの山の麓に茅葺きの小さな寮ができました。竹のその小屋には、中学高校に通うために親元を離れた山地民の子どもが11人。そして寮母の中野穂積さん。生徒たちとの日々から見えてきたのは、山の人々を取り巻く環境の厳しさでした。山に暮らす人々が独自の生活様式と精神性を守り、生活を向上させていくための換金作物は何か。模索するなかで出会ったのがコーヒーでした。２０１１年、第２寮の暁の家でスタッフや生徒たちと種を播き育てたコーヒーの苗木を山に定植。有機栽培によるコーヒー作りが本格的に始まったのでした。先月号に続き、後篇をお届けします。

梅や桃、アボカドなど幾種もの果樹を混植したコーヒー畑に植えられていたヒマラヤザクラ。１月の収穫期、乾季の空にピンクの花を揺らしていた

焼畑の煙害はチェンマイ、チェンライなどの都市部を中心に深刻な問題となった。現在北部タイでは２月中旬から４月中旬までの２ヶ月間、焼畑はおろか、庭で落ち葉を焼くことさえ禁止されている

暁の家で生徒たちと植えたコーヒーの種豆はカビ防止剤を使わなくてもほぼ100パーセント発芽。双葉が出たら苗床からポットに移植する

苗をビニールポットに植え替える生徒たち

育てた苗木を山に運ぶ準備

急斜面の山の畑に丹精した苗木を植える

不可能と言われた有機栽培で安全で美味しいコーヒーを

２００８年から始まった東京のＮＰＯ、ALL Life Line Net の生活向上プロジェクトでは、生徒の実家の山の畑にコーヒーを植えるばかりでなく、私自身がコーディネーターとなり、チェンマイ大学で育てたコーヒー苗木を買い受け、チェンマイ県、チェンライ県の支援先の農家に配りました。そしてコーヒー栽培と加工について、山間地の農家の人々に研修を受けてもらうことになりました。

私も研修室の隅の椅子に腰かけ、農民たちと共に研修を受け

ました。共に移植、定植、剪定、収穫や加工、焙煎の実習を受けました。日本の外務省から支援を受けたこのプロジェクトは3年続き、私は研修を3回繰り返して受けたことになります。研修についてもチェンマイ大農学部の先生方が引き受けてくださいました。

研修や見学、現地視察を繰り返した結果、このコーヒー栽培は暁の家でもできると思うようになりました。しかもロイヤルプロジェクトの講師から不可能と断言された有機栽培でやってみようと考えるようになったのです。

今までリス生徒寮、暁の家(※)では、有機栽培で自給用の米や野菜を作ってきました。コーヒーも昔は自然栽培、有機栽培であったはずで、世界各地で栽培されているコーヒーと競合していくためにも、安全で美味しいコーヒーを作ることが一番だと思われました。

支援してきたチェンライ県メースワイ郡、ターコー地区の農家の人々にも問いかけてみました。多くは生徒、卒業生たちのお父さん、お母さんたちです。皆、種からカビ防止剤も使用しない方法で、コーヒーの木を育てることに共鳴してくれました。

暁の家に種を播き生徒たちと苗を育てる

暁の家で生徒たちとコーヒーの種豆を苗床に植え、45日から2カ月かけて発芽させ、その双葉をビニールポットに移植しました。カビ防止剤など使わなくても、種は新しければ、ほぼ100パーセント発芽したのです。

水やり、施肥、苗木の成長に伴っての並べ替え、害虫の駆除など、すべて手作業、スタッフ、生徒たちとの共同作業となりました。強い日差しを避けるため、コーヒー苗木は寒冷紗の下で育てました。苗木の成長に伴い、苗木育成舎もどんどん面積を広げていきました。

2011年4月には、山に定植できる立派なコーヒー苗木が7000本も育っていました。言葉だけで奨励するのではなく、私たち自身が有機でコーヒー栽培ができるということを、そして有機栽培のコーヒーで経済的に自立できるということを証明して見せなくては、と考えていました。

また乾季末期の2月3月には、雨季を前にしての畑の準備として、焼畑が盛んに行われ、その煙害はチェンマイ、チェンライなど北部の都市部を中心に深刻な問題となっていきました。コーヒーやお茶、果樹ならば、収穫をもたらすまでの数年の間、木の成長を待つことさえできれば、毎年焼き払い、毎年耕して植える必要もなくなるのです。7000本のコーヒー苗木の内、2000本は支援してきた農家の希望者に販売しました。1本15バーツで販売、その内3バーツは農民の自己負担、12バーツは支援金からいただきました。東京のNPOの他、北部日系企業協議会、暁の家の支援者の方々からご支援いただきました。

山畑の計測、山道の整備小屋とトイレの設置、施肥

残りの5000本をスタッフの家族から15年の約束で借り受けた約12ライ(1万9200平米)の山の畑に植えることになりました。植える2か月前の4月には山の斜面を計測、2メートル間隔にコーヒーの木と、そしていろんな種類の果樹を混植する計画を立てました。果樹は、梅、桃、プラム、柿、栗、アボカド、マカデミアなどです。

混植にする理由は、コーヒーがうまくいかない年には他の作物で収入を補うことが可能になること、また混植することによって、単植の場合より害虫の発生を抑えることができると考えたからです。多様であることが自然に近い植生となり、有機栽培がうまくいくと考えました。

2011年2月から、山の畑に通じる道の整備、休息小屋、トイレの設置など、コーヒー畑で作業をするために必要な設備を整えていきました。整備に必要な資金は支援グループ「みどり大阪」が協力してくださいました。

コーヒーを定植する前に、しなくてはならない作業がいろいろあります。草刈り、計測、施肥作業などです。約1か月前に、2メートル間隔に計測を済

※山岳民族の子どもたちが中学高校に通学するための寮。リス生徒寮は1987年、暁の家は1995年にスタート。生徒寮としての活動は2015年に終了。約300人の子どもたちが巣立っていった。現在は学校外教育で中学、高校の卒業を目指す青少年の職業訓練等を実施。

ませたそれぞれの定植位置に穴を掘り、日光にさらして消毒、その後有機肥料を入れて土に混ぜておきます。

施肥作業の日、私もスタッフと共に山のコーヒー畑に向かいました。山の急斜面での作業は、クワを振り上げるどころか、立って自分の体重を支えるのさえ大変です。バランスを崩せば転げ落ちてしまいます。私は半日働いて、昼からは若いスタッフに任せようともくろんでいました。

ところが、作業を手伝ってくれていたアカ族の人々と共に小屋でお弁当を広げた時、年配の女性たちが思ったより高齢らしいことに気づきました。年を尋ねて驚きました。70歳で現役なのです。それであなたは？と聞かれて戸惑いました。正直に55歳と答えると、「まだ若いね」と笑われました。

私は急に恥ずかしくなりました。昼からは昼寝を決め込むなど十年早いとあきらめました。昼食後の休息もそこそこに、女性たちは軽い足取りで山の斜面を登って行きます。黒っぽいアカ族の上着と頭巾もあって、その後ろ姿はまるで忍者のようでした。

コーヒーの苗木５０００本と果樹を山に植えた日

２０１１年６月25日、お天気は植樹にもってこいの曇り空、標高１１００メートルの山の畑ではひんやりした風が吹いていました。暁の家の中高生、スタッフ、支援者の男性とその息子さん、近くのドインガーム村で頼んだアカ族の人々を入れて総勢63人、５０００本のコーヒー苗木と果樹を植えていきました。植えた後はしっかり踏み固め、目印の竹の棒を支えにします。水やりなどはできません。後は天に任せるだけなのです。

山で作業した帰り道、汗まみれの身体を夕暮れ前の風にさらしながら、遠くの山波を眺める時、困難が多い山に住み、その斜面を耕し続ける人々の気持ちがほんの少し分ったような気持ちになります。

山の人々が山に住み続け、その文化と生活様式、さらにはその独自の精神性を守っていくことができますように。コーヒーの木やその他の果樹たちが、より良い生活のための収入をもたらし、山の環境を守っていくことができますようにと、祈らずにはいられませんでした。

コーヒー豆の皮むき機を村に貸し出す

定植したコーヒーの木が、実を付け収穫できるようになるには、さらに2年かかります。種から数えるとちょうど3年かかることになります。

私たちより先にコーヒーの木を植え、収穫できるようになってきている支援した農家の人々からコーヒー豆を買い入れ、焙煎して販売することにしました。それがプロジェクト終了後も農民たちを支援することになり、コーヒーの販売収入によって暁の家の活動自体が自立していくことができると考えたからです。

支援したチェンライ県メースワイ郡ターコー地区の六つの村の内、一番まとまりの良かったのがサンクラン村です。暁の家ではその後の支援として、ラフ族の村サンクランにコーヒー皮むき機を貸し出すことにしました。

コーヒーは、収穫した直後のチェリー豆でも、自家用の皮むき機で加工する農家に販売することができます。２０１１年当時、１キロ18バーツほどで売買されたチェリー豆は２０１７年現在では24バーツ前後になっています。しかし自分で皮をむき加工して乾燥させれば、さらに付加価値が付き高い値段で売れる上、販売する時期を選ぶこともできるのです。

サンクラン村には皮むき機を持っている農家はなく、しかも電気がまだきていません。暁の家で手動コーヒー皮むき機を購入し、サンクラン村に貸し出すことにしました。１キロ当たり０・５バーツの使用料金を担当者に徴収してもらい、貯蓄して修理費などの維持費に充ててもらうことにしました。

実際には修理することはほとんどなく、村人に話し合ってもらって、共有の計量器を購入しました。また近い将来電気が通ったときに、手動皮むき機に電動モーターを取り付ける費用などに充ててもらうことにしま

写真：中野穂積、チャーナン・ムーレー（p39最下段）、ムシカシントーン小河修子（p35、p42下段）

した。

手摘みの完熟豆がコーヒーになるまで

コーヒーの加工の仕方については地域や業者によって違いますが、一般的に北部タイでは水洗式で加工されます。赤く熟して手摘みされたチェリー豆は、その日の内に皮をむき、水に浸けます。山間地では2日間浸けこみ、ぬるぬるしている豆の表面が発酵して洗いやすくなってから洗い、きれいな水にもう一晩浸けます。麓では1週間ほど、日差しの弱い山間地では10日以上天日干しにし、保存できる状態になるまで、完全に乾かします。

乾かしたコーヒー豆は通気性のある袋に入れ、涼しく湿気の少ない場所で保存します。通常北部タイではそのまま半年ほど寝かせます。そうするとコーヒーの味が安定してまろやかになるのです。

コーヒー豆はまだ薄皮をかぶった状態です。この薄皮をかぶった状態が米でいえば籾の状態で、保存もできれば、植えて発芽させることもできます。そして焙煎する前に更に薄皮をむき、生豆の状態にして、選別、焙煎します。暁の家には2キロまで焙煎できる小型の焙煎機があり、注文に応じて焙煎、粉砕、袋詰めをします。

コーヒーのチェリー豆。完熟豆だけを手摘みする。3月末から4月にかけて咲く花は白く、柑橘類の花に似た香り

皮むき機を使ってコーヒーの実の皮をむく村人たち

薄皮をむいたコーヒー豆を選別する暁の家の実習生

上から、赤い皮をむいた豆を水に浸けてぬめりを洗い落とす。天日干しで乾燥（米に例えると籾の状態。半年ほど寝かせる）。薄皮をむいた生豆。焙煎してコーヒーに

目と耳と嗅覚を動員して焙煎。豆のはじける音に耳を澄ませて頃合いを計る

袋詰めしてルンアルン・ファミリーコーヒーの完成

有機栽培の厳しさ 乾季の山畑を耕して木が育った！

山の畑にコーヒー苗木を定植し、1年が経ち2年が過ぎ、最初の僅かな収穫を喜びつつも、3年目になると、有機栽培の難しさを思い知らされることになりました。化学肥料を施したコーヒーの木の成長とは、格段の差がつくようになったのです。コーヒー畑の近くの村の

コーヒー皮むき機を貸し出すことにしたラフ族のサンクラン村で。前列中央が中野穂積さん

人々に「化学肥料を入れないとコーヒーの木がだめになるよ」「悪いことを言わないから化学肥料を入れなさい」等、会う人ごとに言われました。

いつまでも小さいコーヒーの木を思い浮かべ、何とか打開策をと思案する日が続きました。

ある時アカ族の先輩コーヒー農家の男性から、乾季のうちに畑の全部を耕してみるといいよ、と助言されました。乾燥の激しい季節に耕しては、コーヒーの木を枯らしてしまうのでは、と半信半疑でしたが、藁にもすがる思いでやってみることにしました。

2015年の1月の土曜日、暁の家の最後の中高生たち第18期生7名、新たな試みとして受け入れ始めた学校外教育生2名、スタッフ総出で乾季のコーヒー畑を耕しました。その後村人にも3日ほど手伝ってもらい、約2ヘクタールのコーヒー畑全部を耕しました。

そして乾季明けの雨が降り、雨季に入って雨が降り続いた後、コーヒー畑を見たときの驚きと喜びは忘れることができません。耕した土壌に、しっかり

草刈り、計測、施肥、道路や休憩小屋、トイレの設置など様々な準備を経て、2011年6月25日、種から育てたコーヒーの苗木5000本を果樹とともに山の畑に定植した。生徒、スタッフ、アカ族の村人と支援者合わせて63人が参加

と雨がしみ込んだのでしょう、委縮していた小さな木たちが、ぐんと背丈を伸ばし、広げた枝葉をゆったりと風に揺らせていたのです。やったという幸福感がじんわりと身体の隅々まで広がっていくようでした。

コーヒー畑に近いドインガーム村のアカ族の人々も「ヨム、ヨム（良かったね、良かったね）」と手を握ってくれました。

暁の家のコーヒーの木が収穫をもたらすようになってから4年目、お陰様で多くの方が暁の家で焙煎したコーヒーを飲んでくださるようになり、酸味と苦みのバランスのとれた後味の良いコーヒーとしてご好評をいただいています。まだまだ改善しなくてはならない点はありますが、これからも支援してきた農家の人々と共にコーヒーの質の向上と、収入による自立と生活の安定を目指していきたいと思います。

私たちにとっては思いがけないコーヒー栽培という試みでしたが、そのおかげで山に住む人々の心にもっと寄り添うことができるようになりました。支援してくださる方々にもコー

山に定植して３年、木の成長に差が。有機栽培の難しさを知る。乾季のうちに畑を耕すといいという先輩農家の助言を受け、暁の家の寮生、学校外教育生、スタッフ総出で２ヘクタールの畑を耕した

雨季に入り、枝葉を広げ、青い実をたわわにつけたコーヒーの木▶

ヒーを飲んでいただくことで、まだ見ぬ山の人々の暮らしにも思いを馳せていただくことができると喜んでいます。

山間地の青年たちと木を植え水源の森を作る

今年は生徒寮を始めてから30周年になり、記念事業として山間地に住む青年たちと水源の森を作っていく活動を始めることにしました。近年、山間地では、乾季末には生活用水に事欠く事態となっています。それぞれの村で貯水タンクを設置したり、水路を変えたりの打開策が取られていますが、遠回りでも確実な問題の解決は、木を植えることだと考えました。

青年たちを中心に、村人たちに森の木の種や苗木を採集してもらい、ポットに植えて１年間育てた森の木を水源近くに植え、水源の森を広げようという試みです。

苗木はプロジェクトで購入、その収入は個人、グループ、村で役立ててもらいます。雨季に入ったら皆で水源近くに植え、乾季には防火帯を作り、山火事、焼畑の火から苗木を守ってもらいます。水源の森と一緒に、青年たちの地域を守り、愛する心も育っていってほしいと考えます。この試みは10年続け、森が大きく広がっていく様を見届けたいと願っています。

コーヒーの木もお茶の木も、そしてアボカドやいろいろな果実の木も、その他の生き物たちも、その大きな森に守られながら育っていくことでしょう。そして山に住む人々の暮らしもその森の中で満たされ、安らかであり続けることを願わずにはいられません。

中野穂積（なかの・ほづみ）
ルンアルン（暁）プロジェクト代表、高地民教育と開発財団事務局長理事。１９８７年にリス生徒寮、１９９５年に暁の家を開設。１９９１年に第３回毎日新聞国際交流賞、２０１０年に外務大臣表彰受賞。

猫のマーマーと暁の家で

ルンアルン（暁）プロジェクト http://www.rungarun-akatsuki.ednet.jp　E-mail:rungarun_akatsuki@yahoo.co.jp